

## 耳鼻科学教室

当時教室には長谷川高敏教授、江上薬劑男助教、柴田精郎講師、前田豊助手、田中敏助手、林益松学部仮卒業生、技術雇北岡熊雄氏、雇の玉屋キクエ氏、傭人の佐藤フサエ、山口綾子の両氏、榎山タマノ看護長以下二十二名の看護婦が勤務中であつた。

### 被爆時の状況

長谷川教授は二階の便所で被爆し若干のガラス破片創を受け後、放射能症状起り約一年で回復する。

江上助教は道尾滑石の自宅に、柴田講師は西上町に居て被爆を免る。

前田助手、榎山看護長は病室にいてガラス破片創を無数に受ける。

田中助手、林仮卒業生は大浦看護婦と共に外来患者室で被爆しガラス破片創多数。

北岡、佐藤、山口氏は教室内で被爆。玉屋氏は二階研究室（北側西端）で爆死。

中野、内野、倉橋、浜田の諸看護婦は数名の一年看護婦生徒（氏名不詳）と共に物療科との間の空地で材木の釘抜き作業中全員爆死す。

霜川看護婦は山里町の自宅で病気療養中爆死。橋川、長浜、峯、保家の諸看護婦も教室内で被爆死亡す。

### 死亡者の官職並に氏名

官職	氏名
雇	玉屋キクエ
四年	中野キクノ
四年	霜川アサノ
四年	橋川ヤスノ
三年	内野和代
三年	倉橋マス子
二年	浜田ミユキ
二年	長浜イト
二年	保家信江

### 原爆体験記

長谷川 高敏

午後の講義の準備を終えて便所に入った。そして、その入口の廊下で倒れていた。後でその場所に行つて見ると、天井から折れ曲つた太い鉄管がぶら下り、壁とそれとの間の狭い間隙に倒れていたのである。私のはつきり覚えてゐるのは、何か落下物のグワーと轟き渡る音だけであ

る。そのほかには、臍気乍ら強い閃光が輝いた様にも思える。その時まだ便所内に居たので、風圧の為入口から廊下へ吹きとばされたらしい。そして意識を失つたものと思われる。気がついて自分の倒れているのを知つたが、眼が見えない。煙のため四辺が見えなかつたのではない。全く視覚のない無の世界なのである。深い悲しみと焦燥で、私は握りしめた拳を何度も何度も眼瞼にこすりつけた。じつとして居られない衝動にかられるが、動くことが出来ない。然し、幸い暫くすると、すつと一時に四辺が見え出した。煙が濛々と廊下に満ちているのである。それで直ぐ立ち上つて外へ逃れた。失明状態だつたのは強い光の刺戟の為であろうか。

爆風に吹きとばされて廊下の壁と落下した鉄管の間隙に倒れていたのであるが大きい傷はなかつた。ガラスの破片で背中は無数の小さい傷を受け、頭部と腕に一寸した裂傷を受けたほか、足を捻挫しただけである。しかし、熱線も受けたらしく、ズボンの大腿部に一種直径程の焦げた孔が数個あり、その皮膚が赤黒くなつていた。これは浮腫も起さず潰瘍も造らずにすんだ。裂傷の方は化膿して中々癒らなかつたが、面白いことに、腕の裂傷の縁に二種位の産毛が沢山生え出し、傷の治癒と共にこれも次第に無くなつて行つた。

被爆後私は極めて速かに消耗した。そして所謂「骨と皮」になつてしまつた。鏡に映る顔が、黒土に似て、乾燥し蒼黒いのに驚いた。暑い日が続くが、今迄と違つて汗がにじみ出ることなく皮膚が乾燥していたのである。しかし汗分泌障碍が常に認められたわけではなく、動くといつも発汗した。終戦前日の八月十四日から十日ばかり、当時角尾学長が静養

されていた滑石村で私も静養することとなつたが、学長の容態が悪いと云う知らせで、数丁ばかり青田の路を急いだことがある。捻挫してふくれ上つた足に地下足袋をはき、びつこを引き乍らステッキを頼りに草いぎれの路を進み、流れる汗をふいたものである。

被爆から半月余り後、微熱から八度少しの熱が出るようになった。そして紫斑が現れて来た。これが出ると思いと伝えられていたので、前膊、上膊、大腿とだんだん拡がって行くのを、毎朝嫌な気で眺めていた。そして立ちくらみもし、頭が重く、胸苦しく、鬱陶しい気持ちであつた。その頃滑石から移つて天草高浜の江上君の生家で厄介になつていたが、母堂を始め手厚い看護を受けたので、これ等の症候も次第に消退して行つた。そして九月の中旬から下田温泉で保養することとなり、そこで気がついたのは血便である。便は黄色を失ひ蒼白色で、粘液と血液で被われている。これは相当長く一ヶ月以上も続いたのであるうか。ここで十月の中旬迄滞在したが、漸く気分も晴れて、油画をかいたりした。

この間治療としては、江上君の所でビタミンBの注射を一週間程受け、化膿した傷をきれいにふいて貰つた。紫斑の出た頃同君や家内がしきりに輸血をすすめてくれたが私は応じなかつた。米国の調査団と一緒に仿いている人が輸血の効を放送していたので、当時の割り切れない正義心がそうさせたのであつた。私に一番効果があつたと思うのは、朝も昼も晩も沢山いただいた、あの天草の新鮮な魚肉である。

擱筆に当り、亡くなられた方々の冥福を祈り、大学の復興を願う次第である。

## 原爆の日

田 中 敏

外来三階南面の旧患室、何人目かの患者を立てて治療していた。正面の窓が明るくなつたようであつた。一瞬、床にたゞきつけられていた。

「ポカツ」と言う音を宙天に聞いたようにも思う。真暗で全く見えない、やられたと思ひ、僅かの間隙に伏せていた。生埋めになつたなと思つた。その内に、四角なものがかすかに見えて来たのに気付いた。次第にはつきりして来て、正面の窓だと分つた。それを目標に這い出た。周囲は薄暗いがかうにか見分けられる。「先生！」と叫んで、誰かがとびついて来た。顔には血が幾条も、ざんばら髪から流れていたが声で大浦看護婦と分つた。何やらどなつたが外に誰もいない。そろ／＼と階段をおりて玄關より逃れ出た。建物も折れた立木も、灰色にくすんで見えた。車庫が燃えていた。大学の裏の岡に這い登る途中、道端に何人もうづくまつて、手を合せて拜む人がいた。連れて逃げて呉れと言うのであつた。附近を見ると家は、木材の堆積になつて、未だその中に老人がいると言つていた。子供が一人見つかからないがそれでも一人だけでせめてよかつたと言つて残つた子供を抱いている親もいた。これらの人々も、後日の放射能障碍のあらわれより見て、全部、死をまぬがれなかつた筈である。私が家に帰つてからも頭の怪我や、打撲等を診てくれと言つて来た人々が、無事を喜び合つている中に、次々に死んでいつたのである。

岡の上でフラ／＼している中に長谷川教授、前田助手と偶然おち合い、

坐りこんだ。その頃病室の一角から火が出て来た。街の家々は大体その位置で、倒壊していたので遠目には全てが一様に整然と見えていた。その所々から、煙が出はじめ、やがて焰となり、次第に拡がつて行つた。始めから街全体が燃えあがつたわけではない。従つて瓦と材木の山に埋められて生きていた人が少なからずあり、この人達は生きながら焼かれていつたわけである。大学本部でも、倒壊の中から山木事務官が助けてくれと叫ぶのを聞いた人がいるそうである。そのまゝ大学本部は焼けてしまつた。

火と煙が浦上全野を覆う頃、真昼であるのに夕暮の様に暗く、太陽は赤かつた。雨が少し降つて来て、敵機が一機とんでいた。

とにかく山の向う側に行かねば危いと言う考えで、杖をついて漸く山越えした。長谷川先生は片瀧町の御自宅、前田助手と私は西山の私の家にかえつた。その夜より熱発したが、翌々日、熱が下つたのでとりあえず、浦上に行つてみる事にした。天気の良い日であつた。一軒の家からピアノの音が響いていた。街中人氣の殆んどない静寂の中に妙に調和して聞えた。

井植ノ口を曲ると浦上の平野が一望にひらけてくる。それは熱風と赤い焼土と、焦げた死体との世界であつた。空気がそのものに死臭があつた。山越えして逃げ帰る時見た木々はまだ折れた幹に僅に緑色の葉をつけていたが、今は山のいただきまで褐色に死している。

耳鼻科の病棟に行つて見た。風呂場や、手術室のタイル張りを残して、焼けていた。天井からパイプがたれ下つていた。廊下の中央にそのパイプの下敷になつて浜田看護婦が死んでいた。パイプはおそらく被爆の瞬

間おちたものであろう。パイプをとりわけのけるのにかんりの力が要つた。大部屋の入院室には野中君の遺体があつた。大柄の人でほとんど焼けていたがすぐ分つた。室全体が焼けている。病棟西端に近く、根元から折れた大木のあたりに内野看護婦と倉橋看護婦が倒れていた。両君は焼けてはいなかつた。それだけに炎天の下に、反つて、哀れである。この三君はその後焼けのこり破片を組んで茶毘にふした。

内科との間に、旧物療科の建物を解いた木材が積みかさねてあつたが、全部焼けおちて平たくなつていた。こゝにも何人かの死体があつた様である。

美しい花壇も見る影もなかつた。ほんとうに一瞬にして姿つてしまつていた。何もなすことなく、死者に合掌して、病棟を後にした。

(当時耳鼻科勤務)

### 精神科教学教室

当時の医局員は高瀬清教授、松下兼知助教授、寺田文彦医学部仮卒業生、傭人伊藤三雄、倉田乙二両氏で外に有村シゲ子看護長以下十四名の看護婦が勤務していた。

#### 被爆時の状況

高瀬教授は鹿島へ出張中で被爆をまぬがる。松下助教授は精神科助教授室、寺田先生は病室で被爆。伊藤、倉田の両氏も教室で被爆死亡す。他の看護婦は病棟で被爆し六名死亡。

松下助教授は裏山に避難後帰省療養す。

#### 死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
学部仮卒業生	寺田文彦
傭人	伊藤三雄
看護長	倉田乙一
看護長	有村シゲ子
嘱託	浜崎ルリ子
四年	岩崎松子
三年	竹谷良子
二年	磯田千代子
一年	井戸洋子